

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 久保 博之

平成二十年を迎え、謹んでお祝辞を申し上げます。旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の研修旅行などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年度は県市内外よりの来訪者は約四千三百人を数えました。また、平成元年以来発刊してまいりました、特集「ながさきの空」も本年度で第十九集となります。

本年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の発展に寄与したいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十年

新たまの年を迎えて

理事長 越中 哲也

先ずは子年の新春によせ 御祝詞申し上げます



奈良一刀彫子 (脇山壽子文庫)

一、長崎歴史文化協会を創立して戴いてより今年は二十六年になる。そして私が「新たまの年を迎えて」を書き始めたのは創立の翌年昭和五十八年正月からであったので、子年の事を書くのは今回は二回目となる。前回の子年の記事は平成八年十月発刊した『ながさきの空 第八集』に収録されている。それには長崎では節分の夜、大根にて

にあたったので幕府は享和四年とすべき年号を「文化が開けるように」と年号を文化と改めている。そして此の年より平戸松浦静山公は筆を起し「書物の名を「甲子夜話」と名づけている。甲子夜話は正統あわせて二百巻、其の他三編七十八巻に及ぶ大著として有名であり国重要文化財に指定され平戸松浦資料館に保存されている。

文化元年以後二度目の「甲子の年」は大正十三年（一九二四年）であったが我が国は明治六年明治政府によって西洋曆に改正されていたので年号改正の事はなかった。

今年「甲子」の年ではなく「戊子」の年であり、我が国では「ツチノエ・ネズミ」の年と読んでいる。「史記」の「律書」をみると、戊の字は「万物盛んにしげる」の意味があり、子も亦・滋の字と音を同じくして「しげる」とある。今年「大いに成るに滋って」よい年になるのではないだろうか。

二、次に「子」の字の解説を読むと、象形の古文書には𠂔とある。上の𠂔は頭髪をあらわし「下の♀は小児をあらわす」とあった。♀の型で子ども頭と手はわかるが、何故足は一本であろうかと考え更に同書を読むと小児は常時「おむつ」をしているので記してあった。そして「子」の本義は「父母の間に生れたるものにして」「子」の文字には男女区別なし、後に転じて子は男子の美称となり、天子、孔子、老子などと言えり。「また子の文字は「假借して慈・茲・祀とす。」とあった。

次に「子」の文字は方向にあてると北の方向に当たる。それは子は十二支の最初の文字であり、磁針は必ず北を指すので北を基点とし、それより十二支をあてはめるからである。

長崎港口に「ネズミ島」というのがある。戦前より「ネズミ島海水浴場」として有名であった。子供の頃は「島の型がネズミに似ているから」とか「昔この島にはネズミが多くて畑もできなかった」と聞いていた。然し正徳年間（一七二五年）「積元亭（後に還俗して長崎君舒と改む）が著した長崎図誌（長崎純心大学復刊）によると次のように記してある。

鼠嶼

天門力峯（註・長崎港の入口にある右手の岬で俗に男神という）の西南にあり。初の名は子角嶼・戸町浦の正北に当る故に名づく。世に伝う深堀氏・長崎氏この島を賭して勝負し長崎氏これに勝ち遂に島を取る。

白鼠を作り、其の口に付木をくわえさせ、それを盆にのせた子ども達が各家を廻り、お祝儀をいたゞいて帰る風習があった事を書いたが、この風習は昭和も初め頃には既になくなっていったそうである。

次には、寛政十二年（一八〇〇）京都の人・広川解の著書「長崎聞見録」を引いて「長崎のジャコウ鼠は他見にては見ることなし…この鳴き声をきき長崎の人は吉兆として喜ぶ」と言う記事をのせている。

この稿以来、私は毎年のように新年号には其の年の干支に関する記事を書き載せてきたが、干支の原典は中国の曆法にあり私にも良くわからない事が多い。前回にも記したが干支は其の文字より、干は「幹」であり曆法の根幹をなすものであるとされ、甲乙丙丁…の十種があると記し、次に支は枝であり子丑寅卯…の十二種があると記してある。そこでこの干と支を組み合わせたとき曆法できると言う。即ち第一番目は甲子、次は乙丑、丙寅…の順に組み合わせ再び甲子の組み合わせに戻るには六十年かかり、之を還曆と名づけている。

このような中国の曆法はいつ頃より始まったのであろうかと言う事について、中国史研究の諸先輩の論をみると十干十二支の発想は中国殷の時代（約、三〇〇〇年前）に始まり、十干は日常生活上に最も関係の深い五つの元素である木・火・土・金・水を基本とし、其の一ツ一ツに上（兄）下（弟）をきめて十とし、其の第一の甲は我が国ではキノエ。乙はキノト。…とよんでいる。次に十二支の方は月の運行十二ヶ月に合わせて子・丑・寅…の文字を当てたものであると言われる。それでは子の字には鼠・丑には牛・寅には虎と、文字と動物を合わせたかとの質問については、「それは古来より不明でした…」と言われている。

兎も角・曆の始まりは甲子の年であり、六十年に一度その「甲子の年」を迎えるというので曆法で甲子の年には「制令を改め」心を新たにせねばならぬと言っている。この事に応じて文化元年（一八〇四年）は甲子の年又、野口文竜の注によると「此の島・俗人尙儂島と呼び神功皇后三韓と戦う時この島に尙故にこの名あり」と注している。

然し私は、長崎の方言で、背中に子どもをおんぶしている人、又は背中のまるまった人を「コウゴさん」と呼んでいたもので、コウゴウ島の意味は「港の入口にある小さな丸まった島」の意味であろうと考えている。

三、鼠は大黒様の「つかい物」という。それは大黒様は我が国の大國主命と「黒」と「国」の文字の音がつながるからである。大國主命の出雲神話にはネズミが登場してくるので大黒様とネズミに関係づけて語られるが大黒様は本来佛教の神様で「暗夜を司る佛」nakakalaである。そう言えばネズミの異名を「ヨメ」というのは其の意味があるのかもしれないね。

風信

○新年を寿ぎ・郷土の文芸作家明坂英二氏より新年早々に長崎新聞に連載された「カステラ文学館」をまとめられた文集を戴き年頭より長崎文化史を大いに楽しませて戴いた。（松翁軒刊・二二六〇円。）

○さて、事務局より前号に続いて二月の長崎年中行事を書いて下さいと言われる。然し二月は行事が多いので深く知りたい人は前号で紹介した野口文竜の「長崎歳時記」が長崎県史資料編(四)にあるので御読み下さるとよい。

○長崎で変わった正月行事と言えば「チャンメラ吹き」というのが記してある。そして長崎名勝図絵を見ると其の挿絵が描いてある。

○元日は財布を堅くしめ銭をつかわぬ事、二日は早朝よりトウラゴ（なまこ）売り来る故、お祝儀をつけて買うこと。

○四日より市中の「踏絵」はじまると記し其の町順も記してある。八日は丸山・寄合町の踏絵あり「市中の人あそび人に姿を変え面を覆ふて見物に行く、賑かなり」とある。

○七日は早朝に起き俎板の上に七草を置き、右手に包丁・左手に挿木を持ち七草を敲いて七草のうたをうたう。雑すいを煮て供す。

○十日は恵美須講にて賑う。十一日は鏡ひらき。

○十四日は夜よりモグラ打ち十五日の早朝まで来る。十五日小豆がゆを供す。荒神様の餅をおろす。十六日はやぶ入り。

○二十日は二十日正月、幸木の物を全て下し煮込みを造り家内一同にて食すとあった。

